

平成30年6月12日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370509

研究課題名(和文) 欧文資料Notitia Linguae Sinicaeによる清代中国語研究

研究課題名(英文) Notitia Linguae Sinicae and the Qing Chinese

研究代表者

千葉 謙悟 (Chiba, Kengo)

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号：70386564

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：フランス人来華宣教師ブレマールのNotitia Linguae Sinicae(ca.1728)は18世紀のヨーロッパ人による最も詳細な中国語文法書の一つである。本書の記述言語はラテン語であり、全編において大量の例文からキーワードの用法を示すことが大きな特徴である。研究期間内に学会発表4件、論文5本を公表することができた。本研究の目的の一つはNotitia文語篇の翻訳を進めることであつたので、Notitiaの清代官話研究にしめる重要性を示すと共にその目的をある程度果たしたと考えて良いだろう。

研究成果の概要(英文)：Premare's Notitia Linguae Sinicae (ca. 1728) is one of the famous Chinese grammar by Europeans in the 18th century. Characteristics of the Notitia are below: first it is written in Latin; and the usages of the important xuci(虚詞) are shown through enormous examples from various Chinese works. Our research published four presentations and five papers, hence revealed the feature of the Qing Chinese

研究分野：中国語学

キーワード：中国語学 官話 欧文資料 Notitia Linguae Sinicae Premare

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、中国語の史的研究において中国本土の資料が抱える限界がある。中国語史研究の難点の一つに、本土資料は漢字のみで書かれるため特に音声音韻面の詳細な分析に限界があるということがある。また古典的教育を受けた中国の文人は伝統すなわち古音を重んじる意識から脱却することが難しかったり、口語を記録したはずの資料であっても文語の影響を脱しきれなかったりするという問題もある。

かかる限界を突破するため域外資料は以前より注目を集めてきた。その中でも近年特に注目されているのが欧文資料であり、朝鮮・琉球・日本といった中国周辺地域の諸言語による資料群と併せ「周縁資料」を形成する。

周縁資料は中国語を対象として表音文字による音声表記がなされ、かつ中国文人が内面化している古典的教養から自由な中国国外の人物が著していることが多い。そこから、周縁資料は比較的客観的に当時の言語、特に口頭語を反映していることが期待される。しかし清代の欧文資料はフランシスコ・ヴァロ *Arte de la lengua mandarina* (官話文典、1703) やトマス・フランシス・ウェイド『語言自邇集』(1867)などを除き、言語資料として用いられることが少なかった。そこで本研究では以下のような利点を活かして次節に掲げる研究目的を達しようとした：

第一に、申請者はすでに欧文資料に基づく近代中国語音韻史研究で科研費(若手B、平成23年度～25年度、23720215)を得ており、長期にわたって欧文資料を研究してきた。

第二に欧文資料の中でも非英語資料、特にラテン語資料を扱っている点である。カトリック宣教師による資料は多くがラテン語で書かれているが、その言語的制約ゆえに資料としてはあまり利用されてこなかった。しかし、特に『註解』が記す中国語の観察は詳細を極め、19世紀になっても参照されるほどであり、清代の言語資料としての価値は非常に高い。申請者はすでに非英語資料(ラテン語、イタリア語等)を用いた研究実績(CHIBA, Kengo (2008) “Study on the Sanzijing, a Chinese Textbook of the Collegio dei Cinesi and its Value for the Chronological Phonology of the Hubei Dialect”, Federica Casalin ed. *Linguistic Exchanges between Europe, China and Japan*(Roma: Tiellemmedia Editore, pp.193-208)参照)があり、ラテン語資料を扱うことが可能である。本計画では

『註解』ラテン語原典からの全訳および注釈を完成させて研究の基礎を固めながら、『註解』の記す清代中国語の特徴を解明していく。

2. 研究の目的

本計画の目的は、現代中国語の直接的な来源となった清代の言語について考察することである。中でもフランス人宣教師プレマール(Joseph Henri Marie de Prémare, 中国名馬若瑟)による詳細な中国語文法書 *Notitia Linguae Sinicae* (『中国語文註解』ca.1728, 以下『註解』)を中心的な資料としてとりあげたい。『註解』は全編ラテン語で書かれているが、中国語の文献、音声、文字、口語、文語のすべてにわたって詳細な解説を施しており、資料価値は極めて高いにもかかわらず、言語資料として詳細に研究されたことはないといつてよい。

以上を踏まえ、本研究では以下を目的とする：

- (I) 『註解』の言語的特徴を解明すること
- (II) 『註解』の欧文資料中における位置づけを明らかにすること
- (III) これまで着手されていない『註解』の日本語全訳注を完成させること。

3. 研究の方法

本計画は『註解』を中心資料として18世紀前半の清代中国語の音韻的・社会的実態を明らかにすることを目指す。研究期間内における研究の手順は以下の通り：

初年度はすでに訳注の完成している序論と口語篇から音韻面を検討して研究目的(I)を達成し、次いで次年度に文語編の訳注を(III)をクリアする。最終年度に『註解』全編を通じた検討から、『註解』の中国語史上に占める位置づけを行い、(II)にも回答を出す。また、『註解』の記録する官話の社会言語的特徴を明らかにすることで、(I)の課題への解答をさらに充実させたい。

4. 研究成果

上記の三つの研究目的ごとにその成果を記述する：

- (I) 『註解』の言語的特徴を解明すること
『註解』は清代中国語について重要な情報を提供するが、その一つに声調調値の問題がある。清代中国において役人の共通語とされた官話音は五種の調類を有していた。その調値が欧文資料から検討できる。17世紀から19世紀まで、官話音は声母と韻母の両面にわ

たって基本的には安定しているといえるが、声調の調型に比較的大きな変動が見られる。つまりニコラ・トリゴー『西儒耳目資』(1626)やウェアロ『官話文典』(1703)からの推定では上声が高降調、去声が高昇調であるが、『官話文典』から150年を経たジョセフ・エドキンス *A Grammar of the Chinese Colloquial Language* (1852)ではそれぞれ低昇調、高降調と調型が大きく変化する。この変化の境目に『註解』で位置する可能性が見いだされた。すなわち、プレマールは声調の描写について「上」については上昇し、「去」については押し下げられるかのようであり(略)と述べているが、この描写がピッチの高低を対象としているのであれば、『註解』の著された18世紀前半には上声は上昇調、去声は少なくとも降調の調型を有していたのかもしれないのである。そのような変化後の調型を比較的早い段階で記録しているのが『註解』であるといえるだろう。

(II) 『註解』の欧文資料中における位置づけを明らかにすること

『註解』はそれが発表された18世紀前半よりも、その100年後に大きな影響力を持つようになった。つとにアベル・レミュザが発見した如く、『註解』の草稿はマカオからパリに送られたものの王立図書館に放置され100年以上目の目を見ずにきた。それをレミュザが発見して紹介し、ロバート・モリソンの手によってマラッカで排印本が出され、次いで英訳本が刊行されるという運命をたどったからである。

『註解』はレミュザの主著の一つである中国語文法書『漢文啓蒙 *Éléments de la grammaire chinoise*』(1822)に例文を提供し、他の西洋人学者による文法書においても主要な参考文献の一つとなった。エドキンスの *A Grammar of the Chinese Colloquial Language* (1864)もプレマールを超えるために書かれたと言ってよい面がある。エドキンスは『註解』のことを虚詞の羅列と批判したが、その実多くの知見をプレマールから得ているのである。

(III) これまで着手されていない『註解』の日本語全訳注を完成させること。

本研究開始前の段階で、すでに『註解』の第一部口語篇は翻訳を完了している。そのため本研究計画では第二部文語篇冒頭からの訳注作業を開始した。訳注には用例の出典調査および英語版との対照を含む。結果として

以下のようなことがわかった。

第一に用例として引用される文献の出典とその性格である。つまり『論語』、『大学』、『中庸』、『書経』、『易経』のような基本的な儒家経典から、『莊子』のような諸子の文章に至るまで各種の古典が例文に引用されていることが明らかになった。『書経』や『易経』の引用が多いのは、フィギュリスト(Figurist、索隠派)として中国古典に旧約聖書の記述の痕跡を求めたプレマールの思想的・神学的経歴からすれば不思議とするには足りないだろう。そして理由は不明ながら『孟子』の引用は少ない。それよりも注目すべきは欧陽修への偏愛である。文人の文章としては韓愈も多少引用されているが欧陽修の比ではない。プレマール自身も欧陽修を高く評価しており、『註解』の理想とする書面語を考察する上で興味深い。

第二に1848年に出版された英訳本がプレマールの原文に対して追加、削除した箇所が明らかになった。すでに口語篇ではもともとの音韻体系をプレマールの存命していた17世紀末~18世紀初のものから19世紀中葉のものへ、ローマ字標音もフランス語式から英語式へと改めるという極めて重要な改編を行っている。よって英語版のみをもとにプレマールの時代の中国語を論じることは非常に危険である。このことはつとに指摘してきたが、今回文語篇においても英語訳文が必ずしもプレマールの原文に忠実ではないことが示された。

現在のところ第二部第三章第二節まで訳了しているが、プレマールの筆は個々の虚詞の使用法から修辞の方面へ向け展開していく。そのため古典ラテン語の文学作品が頻繁に引用され、翻訳の難度が上昇する。箇所によっては英訳本では省略されているほどである。しかしその分翻訳する価値のある部分であるとも言えるので、完訳に向けて作業を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

千葉謙悟(2015)「官話音研究における欧文資料について」『中国語研究』57: 1-19(査読有)

千葉謙悟(2015)「プレマール『漢語割記(Notitia Linguae Sinicae)』文語篇(1)」『或問』27: 117-144(査読

無)

千葉謙悟 (2015) 「プレマール『漢語割記 (Notitia Linguae Sinicae)』文語篇 (II)」『或問』28: 197-224 (査読無)

千葉謙悟 (2016) 「プレマール『漢語割記 (Notitia Linguae Sinicae)』文語篇 (III)」『或問』29: 211-228 (査読無)

千葉謙悟 (2016) 「19 世紀西洋人による中国語動詞の把握 -エドキンスによる結果補語構文の分析を中心に-」『中国文学研究』42: 57-81 (査読有)

〔学会発表〕(計 4 件)

千葉謙悟 (2014) 「欧文資料と中国語研究 -意義・現状・課題-」中国近世語学会秋期研究集会、東京: 愛知大学東京事務所

Chiba, Kengo (2016) "Definition of the Standard Dialect in Western Mandarin in the 19-20th Century", International Workshop on the "History of Colloquial Chinese-Written and Spoken". New Brunswick: Rutgers University

千葉謙悟 (2017) 「結果補語構文の発見 -エドキンスの中国語研究より-」中央大学政策文化総合研究所・人文科学研究会共催公開研究会、八王子: 中央大学

千葉謙悟 (2017) 「18-19 世紀西洋人による中国語研究と結果補語構文 -ウァロ、プレマールからエドキンスまで-」中国近世語学会秋期研究集会、東京: 関西大学東京センター

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
千葉謙悟 (CHIBA, Kengo)
中央大学・経済学部・准教授
研究者番号: 7 0 3 8 6 5 6 4

(2) 研究分担者 ()

研究者番号:

(3) 連携研究者 ()

研究者番号:

(4) 研究協力者 ()